

(Ⅳ-37) 横浜の歴史的建造物の調査研究

— 消防隊地下貯水槽 —

関東学院大学 学生員 ○羽賀 理恵

関東学院大学 正 員 増淵 文男

1. はじめに

横浜の開港(1859(安政6)年)は、欧米の文明を積極的に取り入れた、我国における近代化への先駆的な役割を果たしてきた。横浜の消防においても居留地の消防団の組織化が行われ、それまでの破壊による消防ではなく、欧米から取り寄せたポンプ車による消火、見張りを置いた防火という近代消防に変わってきた。市内の消防出張所構内に煉瓦造りの古い地下貯水槽があり、現地調査とその歴史について研究を行った。

2. 貯水槽の構造と機能

調査対象の貯水槽は図-1のように横浜市中区日本大通13番地(明治時代は居留地 238番地)の前横浜市消防局中消防署日本大通消防出張所構内に所在した。

(1) 構造

構造形式は地下埋設物の総煉瓦造りであり、天井はヴォールト構造(写真-1)で、内部に十字の補強用の間仕切があった。構造規模(内壁)は図-2のように、長さ3.200m、幅3.185m、高さ4.500mで間仕切天井までの貯水量は28.5m³であった。

使用されていた煉瓦は、手抜き成形によるもので、形状のばらつきが大きく、煉瓦目地がセメントモルタルでないこと、積み方がイギリス積みであることから、本地下貯水槽は明治20年代の煉瓦構造物の特徴を有していた¹⁾。また、上という刻印のあるものがあり、日本製の煉瓦と推測されたが施工者は不明である。

(2) 機能

1972(昭和47)年まで使用されていたが、現在は機能を停止していた。消防庁の基準²⁾の40m³を満たしておらず、漏水が激しく水位の確認が難しいこと、また、周囲の消防施設が充実してきたことなどから、貯水槽としての指定は解除された。現在ある送水パイプは昭和20年代に設置したもので、使用停止の状態であった。貯水槽内の水質調査を行った結果、現在の水質は水道水及び海水ではなかった。(塩素イオン:45.2ppm)

3. 貯水槽の歴史

貯水槽に関連した年表を表-1のように作成した。

日本大通13番地は、旧居留地消防隊が1871(明治4)年に車庫をつくり、1873(明治6)年には初代として木造の庁舎が建造され、本拠地として使用された。1884(明治17)年に2代目の庁舎が建造されたが、関東大震災時に崩壊し、その後1928(昭和3)年に3代目の現庁舎が完成した。また、1919(大正8)年に私設消防が行政へ移管



〔明治21年〕 〔平成3年〕
図-1 貯水槽の所在地



写真-1 貯水槽内の上部

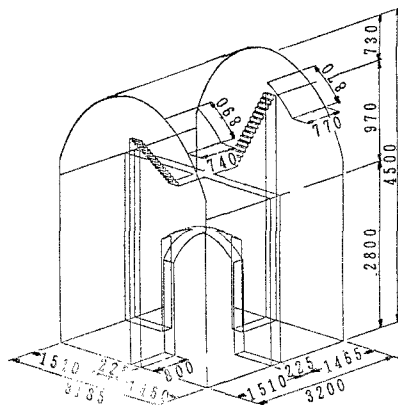


図-2 貯水槽の構造図

した後も引き継がれ、75年間消防署として使われたが、1994(平成6)年3月に山下町72-1に移転した。この場所は日本の消防救急発祥の地1933(昭和8)年でもある、24時間見張りを置く近代式「火の見櫓」が建造された。また、居留地内において、日本人の対応や火消しについてイギリス側の消防夫頭になった「ゴミ六消防」の石橋六之助やイギリス側からオランダ側へ移った増田万吉らは、居留地時代に消防等で活躍した代表人物として有名である。

本地下貯水槽は、消防用貯水槽として建造された地下埋設物であり、現況は庁舎に少しかかった状態で、水槽の役割を終え植込の下にあった。1893(明治26)年の居留地消防隊の年次報告³⁾によるとENGINE STATIONを改築した際にFIRE WELLも改築されており、これが貯水槽建設と推測した¹⁾。旧横浜居留地内に残存する数少ない居留地時代の遺構であり、市街地内にあったが小型なためか、100年も存続していた。

表-1 貯水槽に関する主な年表

	居留地消防隊	横浜消防	横浜都市形成
1859(安政6)年		日本人の民間消防発足。	横浜開港。
1860(万延元)年	増田万吉、火防所と日本人の預かり人となる。 外国人が居留地自衛のための消防ポンプを購入。 消防隊編成、清掃夫として石橋六之助を採用。		
1864(元治元)年	居留地にある消防団の組織化。B.F.B [※] 委員会発足。 (居留地消防隊の創始)		
1866(慶応2)年			豚屋火事で市街地2/3、居留地1/5焼失。
1868(明治元)年	増田万吉が居留地消防隊の頭取になる。		
1870(明治3)年		県が市内に消防組を組織。神奈川裁判所所管となる。六之助を消防総元締に任命。	
1871(明治4)年	居留地消防隊が居留地238番地車庫をつくる。 火の見櫓建造。		
1873(明治6)年	居留地30番地から238番地に移動し本拠地とする。 初代庁舎建造。石橋六之助が火夫頭になる。	万吉、新たに消防組を組織、 頭取となる。	
1875(明治8)年			外国人居留地に30の町名が付く。
1879(明治12)年			豚屋火事を契機に日本大通完成。
1882(明治15)年		消防組規則制定。	
1883(明治16)年		万吉・六之助、「両名社」を興す。	
1884(明治17)年	2代目庁舎建造。		
1887(明治20)年	消火栓を試用して好成績を得る。	市内各所に球式消火栓を設置。	日本初の水道完成。
1889(明治22)年	居留地消防隊が一体化。		市政施行。
1893(明治26)年	engin stationを新築した際、fire wellも改築。 これが貯水槽とみられる。		
1899(明治32)年	居留地消防隊が、日本側の監督下に入る。 薩摩町消防組と改称。		居留地撤去。
1919(大正8)年	私設消防廃止。薩摩町消防組は県に寄付・移管され第二消防署となる。		
1923(大正12)年	関東大震災に庁舎焼失。		関東大震災。
1926(大正15)年	県告示により山下町消防署と改称。		
1928(昭和3)年	3代目(現)庁舎建造。		
1933(昭和8)年	日本で初の救急自動車運用開始。(消防救急の発祥)		
1947(昭和22)年	山下町消防署が中消防署となる。		
1972(昭和47)年	貯水槽の指定解除。		
1976(昭和51)年	中消防署は新庁舎完成により移転。 3代目庁舎は日本大通出張所となる。		
1994(平成6)年	日本大通出張所は山下町に移転。		

注) ※印のB.F.Bはボランティア・ファイア・リゲードの略

作成者:羽賀 理恵 安達 万里子 作成日:1994年3月

4. おわりに

現在の庁舎は、平成6年度末までに撤去の予定であるが、地下貯水槽は明治時代の貴重な煉瓦構造物であり、保存を望みたい。最後に本研究に関して関東学院大学の宮村忠教授のご指導を受け、また、横浜中消防署山下町出張所長の根岸一氏、横浜市開港資料館の堀勇良氏、ならびに横浜市消防局、消防博物館、そして横浜市都市デザイン室に資料を提供していただいたことを記し謝意を表します。

参考文献

- 堀 勇良:『中区日本大通13番地所在横浜市中消防署日本大通消防出張所構内の煉瓦造水槽について』,1987.7.17.
- 消防庁:消防水利の基準を定める告示消防庁告示第7号第3条,昭和39年12月10日.
- THE JAPAN WEEKLY MAIL,1895.5.18.